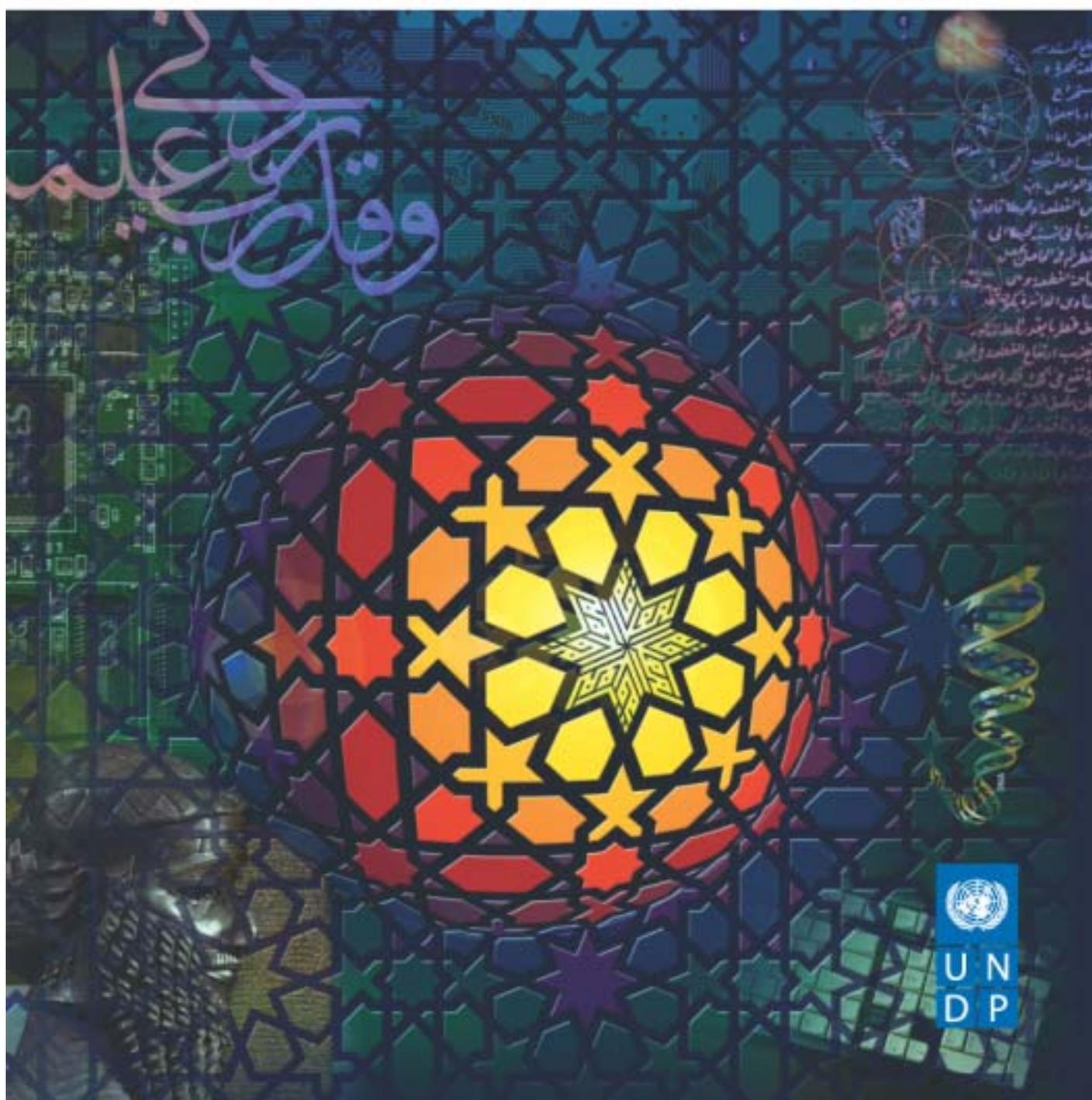


アラブ人間開発報告書 2003 概要

ARAB HUMAN DEVELOPMENT REPORT 2003

— 知識社会の構築に向けて —



アラブ人間開発報告書 2003 概要

ARAB HUMAN DEVELOPMENT REPORT 2003

—知識社会の構築に向けて—

Building a Knowledge Society

国連開発計画 (UNDP)



アラブ人間開発報告書：概要

－知識社会の構築に向けて－

昨2002年、初めて発刊された『アラブ人間開発報告書（AHDR 2002）』は、21世紀の幕開けに際し、アラブ世界が直面する最も重要な開発課題を取り上げた。本年の第2回報告書は、最重要課題の1つである、アラブ諸国における知識社会に焦点をあて、アラブ世界の開発課題への取組みを継続するものである。

AHDRシリーズは、アラブ世界において人間開発を築き上げることを目的にしている。したがって、同地域における人間開発に継続的に目を注いでいく取組みの一環として、本報告書はまず、2002年から2003年にかけてアラブ世界の人間開発の進展に影響を及ぼした、世界、地域、国レベルの最も注目すべき動向のいくつかを概観する。その後、同地域が直面する3つの中心課題の1つである、知識格差の拡大に綿密な検討を加える。まず、アラブ知識社会の基本的概念の枠組みを説明し、それに続いて21世紀初頭のアラブ諸国における、知識の需要および普及、生産の現状について評価を行う。次に、アラブの歴史においてきわめて重要な時期である今日において、同地域の知識獲得に影響を与えている、文化的、経済的、社会的、政治的背景を分析する。これらを踏まえて、分析の最後の項で、アラブ諸国における知識型社会の確立に向け、深層からの社会改革プロセスを進めるうえでの道標を描いた戦略的ビジョンを提示することとする。

喪失の1年、9月11日以降の市民的自由を再検証する

「…この1年間に米国政府は一連の措置を講じてきたが、それらは200年以上にわたり米国憲法制度の中核であった基本的な保障である、米国における基本的人権の保護を徐々に蝕んできた。」

(アメリカ国籍)人権弁護士

ムハンマド・ハサネイン・ヘイカル (Mohammad Hassanein Heikal)

『アラブ人間開発報告書(AHDR)』が鳴らし、アラブ人も世界中の人々も耳にした鐘の音は、われわれの人生を通じ一貫して鳴り続けているすべての鐘の音を呼応させ、鳴り響かせるものであった。それは、知識と学習への呼びかけ、未来への旅に加わる最後のチャンスの告知、清浄を取り戻すための訴え、緊急の優先課題を遂行するための指令、そして、差し迫った危険に対する警告、つまり、アラブ地域を恐ろしい炎の中に飲み込もうと待ち構えている火を、今まだ小さなうちに急いで消すように促す警告の鐘であった。

過去1年間の人間開発を概観して

2つの後退、そして改革の始まり

『アラブ人間開発報告書2002』発行以降の世界的な動向やアラブ地域の動向を振り返ると、知識、自由、女性の地位向上という3つの側面に代表される開発課題への取組み不足が依然として深刻であることが浮き彫りになる。世界的な、またアラブ地域での開発が進展した結果、自由という領域での取組みの重要性は一段と増したとさえいえるかもしれない。

国連人権高等弁務官

故セルジオ・ビエイラ・デメロ国連人権高等弁務官は、「対テロ戦争」が世界中の偏見をいっそう深刻にし、アラブ人に対する差別を増長させ、先進国、途上国双方において人権を傷つけていると、強調していた。

血なまぐさい米国同時多発テロ事件と、あらゆる法律にも神の掟にも反する行為によって、罪のない生命が失われたことから、数多くの国が「対テロ戦争」の一環として、極端な安全措置および政策を採用した。しかしながら、これらの措置と政策は、当初の目的を逸脱し、市民的および政治的自由の後退を招いた。世界中の多くの国々、特に米国では、海外に居住、留学、旅行するアラブ人およびイスラム教徒の生活の質が低下し、アラブ世界と西

側諸国間の文化交流が妨げられ、アラブ人の若者達が知識を得る機会が断たれてしまった。

これらの措置の結果、まず起こったのが、米国で学ぶアラブ人留学生数の大幅な減少である。アラブ諸国公館から得られたデータによると、在米アラブ人学生数は、1999年から2002年の間に平均で30%減少した。

そして、先進国がとった自由の制約という措置は、一部のアラブ諸国政府による市民的および政治的自由を制限する新法制定の正当化という、最悪の結果を招いた。アラブ諸国は、集団でテロの定義の拡大解釈を採用したが、それは「対テロアラブ憲章(The Arab Charter against Terrorism)」の中に、同地域の制度的定義として示された。そうした拡大定義は濫用される可能性があるため、この憲章には、アラブおよび世界の人権団体から批判が集まった。同憲章は、検閲を認め、インターネットの利用および印刷や出版を制限している。そのうえ、拘留または拷問の禁止が明文化されておらず、拘留の合法性を問う条項もない。さらに、個人または集団の盗聴を許可するための裁判所命令を事前に求めていることから、個人の自由の保護もしていない (Amnesty International)。

イスラエルは、パレスチナの領土を再占領し、ぞっとするような人的犠牲と物質的破壊をもたらしており、高く評価されている人権団体が、「戦争犯罪」と呼んだ行為を犯している (人権ウォッチ報告書 2002)。2000年9月から2003年4月にかけて、イスラエル占領軍は、2405人のパレスチナ市民を殺害し、4万1000人を負傷させた。死者の大半(85%)は一般市民で、子供が大きな割合(20%)を占めた。国連児童基金 (UNICEF) の推計によると、負傷した子どもの数は7000人に上り、永久障害を被った人の数は2500人、うち500人が子どもだった。

人権ウォッチ報告書 2002 - ジェニン:IDF 軍事行動 -

「いくつかの報告事例の中には、ジュネーヴ条約の重大な侵害または戦争犯罪が行われた、と推定するに十分な証拠がある。」

一方、米英主導の連合軍は、イラクを侵略および占領し、イラクの人々とその地域に新たな問題を持ちこんでいる。この問題を克服するには、イラクの人々を代表するグッド・ガバナンスの制度のもとでイラクの人々が、国際法に従って基本的権利を行使すること、占領から自由になること、富を回復すること、そして、人間開発の視点から自国再建に主体的に取り組むことを可能にする以外にすべはない。

外部からアラブ地域を再構築しようとするこれらの取組みとは異なり、このAHDRシリーズでは、社会変革プロセスを通じて内部からアラブ地域再構築を目指すアラブ人専門家等による戦略的ビジョンを具体的に示し、アラブの人間開発に資することをめざしている。厳しい自己分析に基づいた、そうした内部からの改革のほうが、はるかに妥当で持続可能な代替策となることだろう。

アラブ諸国の開発の度合いについていえば、女性の地位向上ならびに市民参加のいくつかの側面で改善が見られている。女性代議員および行政機関の女性上級職の数が増加したほか、数多くのアラブ諸国では、議会選挙が実施され、中には数十年ぶりに実施する国もあった。しかしながら、改革の必要性に対する意識の兆しを一時的に伴った、こうした明るい材料も、言論、表現、結社の自由の領域における新たに引き起こされた後退によって陰りが出ている。

本報告書による域内協力の現状評価結果からは、第1回アラブ人間開発報告書がいうところの「アラブ自由市民圏 (An Arab Free Citizenship Zone)」の実現にはほど遠いアラブ統合の姿が浮かび上がってくる。

アラブ世界における知識状況

知識型社会とは、知識の普及と生産、およびその適用が、文化、社会、経済、政治、私生活といった人間活動のあらゆる側面において、活動を組織立って行ううえでの原理となる社会のことである。今日知識は、人の自由の範囲を拡大したり、グッド・ガバナンスを通じてこれらの自由を保障する能力を高めたり、さらには正義と人間の尊厳という、より高度な人間の道徳目標を達成する手段を与えることができる。

本報告書は、こうした知識型の社会とアラブ諸国の知識状況を比較しつつ、知識の普及と生産という、知識を獲得するうえでのシステムを構成する2つの主要要素の特徴を深く検証する。

知識の普及：教育における障害とメディアにおける明るい材料

アラブ諸国における知識普及のための基本的な手段（子どもの社会化としつけ、教育、メディア、翻訳）は、社会的、制度的、経済的、政治的な根深い障害に直面している。その中で最も顕著であるのが、個人や家庭、および組織が教育のために利用できる教材や資源の不足と、それらの使用において課せられているさまざまな制約である。その結果、こうした知識の普及はしばしば挫折し、知識生産に必要な知的、社会的環境の整備をするには不十分で成果があがっていないことが多い。

調査によると、アラブ人家庭の間で最も広く行われている育児法は、過保護を伴う権威主義的なものだという。これは、子どもの独立心や自信を育て、社会的な能力を発揮することを妨げ、また、受身の態度や優柔不断な態度を助長することになる。そして、何よりも、質問しようとする意欲や探究心、自発性を抑圧することにより、子どもの思考方法に影響を及ぼす。

20世紀後半にアラブ諸国が遂げた、教育の目覚ましい量的拡大も、

他の開発途上国あるいは人間開発の必要条件と対比するならば、依然としてささやかなものである。女性の非識字率は相変わらず高く、とくに開発の遅れている一部のアラブ諸国でその傾向は強い。また、基礎教育を受けられない子どもの数も依然として多い。高等教育ほど、就学率が減少する特徴がみられ、教育に対する公的支出は、実際のところ、1985年以来減少傾向にある。

しかしながら、あらゆる場合において、アラブの教育が直面している最も重要な課題は、質の低下である。

マスメディアは、大衆への知識の普及にとって最も重要な媒体であるが、アラブ諸国の人口に対する情報メディアの割合（1000人当たりの新聞、ラジオ、テレビの数）は、世界平均を下回っている。先進国における1000人当たりの新聞の発行部数は285部であるのに対し、アラブ市民1000人当たりでは53部にも満たない。

大半のアラブ諸国のメディアは、報道の自由、表現および言論の自由が著しく制限されている環境下で運営されている。ジャーナリストは、不法な嫌がらせや脅しのほか、身体的な脅迫を受けることさえある。また、検閲が横行しており、時には新聞およびテレビ局が独断的に閉鎖されることもある。ラジオ局とテレビ局をはじめ、メディア機関のほとんどは、国営である。

しかしながら、ここ2年間に、競争の出現によって、アラブの情報メディアの状況にいくつかの改善がみられた。より独立志向の強い新聞が現れ、昔からある国営の報道機関の厳しい報道統制に対し、政策論議、ニュース、情報等の点で異論を唱えるようになってきている。これらの新聞は、拠点を海外に置いているため、国家検閲を免れることができる。このほか、放送メディアの分野でも、国営テレビ局の独占に挑み始めた民間衛星テレビ局が出てきた。これは、放送がアラビア語でなされているため、アラブ視聴者全体という最も大きな人口が対象とされているという点で、非常に注目すべき動向であるといえる。

情報基盤をみると、比較的新しい情報チャンネルは、多くのアラブ諸国がこれまで築いてきた土台の恩恵を相当に受けている。とはいえ、一般的な指標では世界の最低水準にある。アラブ諸国

における電話回線の数は、かろうじて先進国の5分の1に留まり、デジタル・メディアの利用率も、世界の最低レベルで推移している。コンピューターの保有率は、世界平均が1000人当たり78.3台であるのに対し、同地域では1000人に対しわずか18台に過ぎず、インターネットに接続しているのは、人口の1.6%に過ぎない。これらの指標をみれば、情報技術を知識普及に適用できるだけの基盤が、十分整えられているとは言い難い。

翻訳は、情報の普及、および他の世界との意思疎通にとって重要な手段の一つである。しかし、アラブ世界における翻訳活動は停滞ぎみで確立されていない。1980年から85年の5年間に出版された翻訳作品数は、平均で、100万人当たりわずか4.4作品だった（年間100万人あたり1作品未満）。これに対し、ハンガリーでは100万人あたり519作品、スペインでは920作品だった。

知識の生産：乏しい生産、創造性のかすかな光

知識資産を知識資本へ変換するには、すべての分野、すなわち自然科学、社会科学、芸術、人文科学、および、その他のあらゆる形の社会活動分野において、新しい知識を生産することが求められる。

報告書のデータを見ると、特定分野、特に科学研究分野における知識生産が停滞していることがわかる。知的生産量の乏しさに加えて、アラブ諸国における科学研究は、基礎研究が弱く、情報技術や分子生物学などの分野における先進的な研究がほとんど欠如しているため、発展が遅れている。また、わずかな研究開発費（現在、国家の研究開発に対する支出はGNPの0.2%以下と、かろうじて人権費を捻出できる程度に留まっている）、貧弱な制度的支援、科学の発展と振興に不利な政治的・社会的状況にも苦しんでいる。同地域では適正な資格を持った知識労働者層が比較的少ない。アラブ諸国で研究開発に携わっている科学者およびエンジニアの数は、人口100万人当たり371人そこそこである。この数は、100万人当たり979人という世界的平均をはるかに下回ってい

る。また、全アラブ諸国の高等教育への理系入学者数も、韓国など、知識を国の躍進に活かした国々と比べると、概して少ない。ただし、アラブ諸国の中でも、ヨルダン、続いてアルジェリアは、この分野において突出している。

知識の障害：検閲

著者および出版社は、22 人のアラブ検閲官の気分と命令への服従を余儀なくされており、そのため本は実際の市場で自由かつ容易に流通できない。

Fathi Khalil el-Biss アラブ出版社連盟副会長

科学技術においては知的生産量が乏しく、人文科学分野の成果も閉塞状況にあるのとは対照的に、アラブ社会が誇りとするのが、最高水準の評価に値する、数多くの傑出した文学および芸術作品の存在である。その理由の1つとして、科学技術には相当の社会的および経済的投資が必要とされる一方で、芸術家の場合、多大な制度的または物質的支援がなくても良質の作品を創作することが可能であり、また常に創作しているということが挙げられる。文学や芸術作品の革新は、研究開発において創造力が育まれるものとは異なる条件のもとで実現されているのである。すなわち、アラブ人科学者が、社会的、制度的支援を受けずに、ノーベル物理学賞を受賞する可能性は極めて低いが、アラブ人小説家が、そうした支援のない状況でも、文学賞の榮譽に浴することはあり得る。経済的に独立することで、作家の知的自由が強化されることもあるかも知れないが、文学的創造力と富裕であるという条件の間に相関関係が存在するようには思われない。時には苦境が、創造力豊かな文学のための動機や知的・政治的刺激を喚起することもある。だが、このように芸術的創造性は社会的制約に屈するものではない一方で、人々が書物やその他の形式の芸術的表現を享受する機会は、自由の欠如によって妨げられる。

文芸書の出版は、いくつかの大きな課題に直面している。その中には、一部のアラブ諸国で非識字率が高く、そのため読者数が少ないことや、アラブ人読者の購買力が低いことなどが含まれる。このような読者の限定は、アラブ世界で出版される書籍件数にも

明らかに表れており、世界人口の5%をアラブ人が占めるにもかかわらず、アラビア語出版物が占める割合は1.1%以下となっている。アラブ諸国における文学および芸術関連書籍の発行は、一般水準を下回っている。1996年には1945点と、世界の出版件数のわずか0.8%に過ぎなかった。これは、人口がアラブ諸国全体の4分の1に過ぎないトルコ一国の作品数よりも少ない。アラブの出版市場の特徴は、宗教関連書籍の豊富さに比べ、その他の分野の書籍が少ない点にある。出版物全体に占める宗教関連書籍の割合は、世界の他地域では5%であるのに対し、アラブ諸国においては17%にも上る。

アラブ諸国における知識状況に関する本報告書の分析結果は、大量の人的資源が制約の多い社会的、政治的環境から逃れて創作へと活動の場を移しているものの、状況が好転すれば、彼等によって知識復興のための強固な構造的基盤が提供される可能性が高いことを示している。

知識の成果の蓄積：目的と手段

報告書チームは、一部のアラブ系大学の教職員を対象に、地域の知識獲得に関するサンプル調査を実施した。回答者は、自国の知識獲得状況についておおむね不満を表明した（平均満足度は38%）。また、アラブ知識の人間開発への貢献度に対する評価は、それよりわずかに低かった（平均評価は35%）。調査の結果、アラブ諸国では、知識獲得の自由に、数多くの制約があり、はるかに強力な知識獲得へのインセンティブが必要とされていることが確認された。

回答者は、知識体系のさまざまな側面を評価する中で、テレビとラジオがメディアに相応しい報道の自由を与えられていないこと（30%）が、知識獲得の意欲を削ぐ最大要因の一つであると主張している。公共部門における研究開発にも同様の評価が与えられているが、回答者の見解では、後者のほうがより自由度が高いとされている。したがって、この問題が組織および資金調達の

問題と深い関連性を有していることが伺われる。

アラブ諸国とその他の国の知識資本を比較するために、本報告書は、さまざまな知識資本の側面に関する10の指標からなる、新しい合成指数を開発した。この指数を使った測定を試みた結果、データや方法論でいくつかの制約に直面したものの、アラブ諸国は、知識資本の質量ともに、先進工業国のみならず、主要開発途上国からも大きく遅れていることがわかった。

この指数を適用する際に、矛盾する、または予想に反する結果に突き当たった報告書チームは、その他に、高度技術を含む輸出品目など、知識の成果の蓄積または最終的な結果と知識に関するその他の指標との関係も考察した。分析の結果、この2つのグループの間に相関関係は見いだされなかった。

この分析によって得られた結論とは、アラブ諸国が直面している重要課題は、知識指標で他の国に追いつくことだけでない。むしろそれを超えて、とくにアラブ社会全体として、十分な資源の裏づけのもと、強固な制度的構造を発達させること、そして、そのために必要な政治的意志を明確にすることを通じて、他の国々と比肩できるような知識の成果を達成できるように努力することまで含まれるというものである。

輸入技術：消費 対 適用

アラブ諸国では技術移転と技術の適用を試みたが、期待したような技術進歩の達成も、投資による魅力的な利益の創出ももたらされなかった。技術の輸入は、技術の普及や生産はもちろんのこと、受入国における技術の適用や内部化にもつながっていない。

この失敗は、アラブ諸国における有効な技術革新と知識生産システムの不在と、知識社会を支えるうえで欠かせない基本的な価値と制度的枠組みを根付かせるような合理的な政策の欠如という2つの大きな欠陥によって説明できる。これらの問題をさらに深刻化させているのが、現地での知識の生産に投資をしなくとも、

科学製品の輸入を通じて、さらには、域内で知識獲得を促すような科学指向の伝統を地元につくらなくとも、先進国の大学や研究所の協力にアラブの中核を担う科学者の訓練を頼ることで、知識社会の実現は可能であるという誤った信念である。

アリ・ムスタファ・ムシャリファ (Ali Mustafa Musharrifah): 知識の前進にとっての科学史の重要性について

「文明国には、科学的思想史の裏づけをもつ文化が必要である。…エジプトの科学分野における活動は、十分な強さ、活力、統制力を取り戻すために、自らの過去に追いつくことが必要である。エジプトでは他国の知識を移転し、それをわれわれの過去と関係なく、あるいはわれわれの土地との関連のない、宙ぶらりんのままに放ってある。そうした知識は、見た目も言葉も概念も馴染みのない、異国の産物である。」

アラブ諸国における技術革新のシステムの不在は、産業インフラと固定資本（ビル、工場、機械、設備）に対する投資が実質的に無駄に終わったことを意味していた。このような投資は、資源を枯渇させただけで、アラブ社会が欲した富も、期待したような社会的利益ももたらすことはなかった。生産手段への投資は、生産能力の増大をもたらすはするが、実質的な技術の移転や所有には結びつかない。さらに、この種の投資によって得られる利益には寿命があり、導入された技術が時代遅れになるにつれて減少し始める。輸入技術を用いて生産された製品やサービスは、現地市場において徐々に採算が見合わなくなり、競争力を失う一方で、先進国における技術と生産は、彼ら独自の技術の改善や革新システムによって絶え間なく更新される。老朽化の進む技術を保有し、いつまでたっても技術革新の道を進もうとしないアラブ諸国ではこうした流れは起こらない。アラブ諸国は、保有する技術水準が時代遅れになるたびに、新しい生産技術の購入を繰り返さなければならないのである。

アラブ諸国は同時に、海外直接投資（FDI）先としても魅力的な中心地となることはなかった。海外直接投資先として人気の開発途上国上位10カ国にアラブ諸国は入っていない。

新しい技術の創出を可能とするような知識を移転し、根付かせ、育成するには、知識生産を誘発するような組織的な環境が求められる。そうした環境があれば、研究開発機関と生産・サービス部門の間の結びつきは強化され、国の技術革新への潜在的な能力が開発されるであろう。

アーマド・カマル・アブルマジド (Ahmad Kamal Aboulmajd)

イスラム教の永続性は、「法の硬直性」を意味するものではない。むしろイスラム教の法は、生活やその形態の変化に対応して、自らを新しくし、改革できることを意味している。イスラム教徒の独自性と特徴は、出入り口のない壁に囲まれた、閉鎖された空間の中で内側を向いて、他の人類から孤立していることを意味しない。むしろ、ともに暮らす人々との意思疎通を意味し、それを通じて、人々にイスラムの教義、法、道徳観にもとづいた、より高適な価値と崇高な理念を提供することを意味しているのである。

ミラド・ハンナ (Milad Hanna): アラブ世界における宗教と知識の調和

アラブ世界におけるキリスト教とイスラム教の共存は、多様性の中での調和のモデルを示している。この共存のお陰で、知識獲得を通じて人類を前進へと導いてきた進歩があったのである。

アラブ諸国の知識獲得に向けた社会状況

知識型社会の根幹としての文化

知識体系は、社会的、文化的、経済的、政治的決定要因に影響される。これらの決定要因の中でも文化は特に重要な位置を占めるが、この文化には学術文化と大衆文化という2側面がある。アラブ文化において、知的遺産はきわめて重要な要素である。そして、この知識遺産のなかでも、文化の伝達手段となるのが言語であり、文化の魂を支配する中心かつ包括的な思考体系を形成するのが宗教である。つまり、アラブの文化システムにおける活動は、道徳的、社会的、政治的価値によって管理・支配されている。

いくつかの反開発的な解釈にもかかわらず、宗教は知識を探求するよう人々に促す：宗教と知識および知識生産活動との関係性は疑いもなく、宗教の性質、ひいては俗世に対する宗教の上位的位置づけから派生する観念と、不可分に結びついている。イスラム教は経典において、宗教と俗世、あるいは現世と来世の間の調和を支持している。俗世とそれにまつわる自然科学に強い関心を抱き、さまざまな形の知識と科学を奨励することが、アラブ・イスラム文明に支配的な傾向であるといえる。

しかしながら、独立後の現代アラブ世界における展開と、国内の政治、社会、経済問題が、アラブ諸国の知的、学術的、文化的生活に深い影響を及ぼした。宗教と、宗教に関連した概念や宗教の目的についての考え方は、こうした進展によって影響を受けた基本的側面の1つだった。抑圧的政権とある種の保守的宗教学者が一緒になって、政府には好都合だが、人間開発を阻害するようなイスラム教の解釈へと先導した。とくに、思想の自由、法的解釈、政権の国民に対する説明責任、女性の社会生活への参加についてこの傾向が顕著にみられる。政治活動が制限された数多くのアラブ諸国では、人々にイスラムの衣服を着用させようとする動きがみられた一方で、イスラムの仮面をかぶった一部の運動は地下へ潜った。国レベル、地域レベル、世界レベルで、アラブ世界における不正義に取り組むための平和的で有効な政治的ルートがないまま、イスラム教徒を自称する一部の政治運動は、政治行動主義の手段として、狭義の解釈と暴力に訴えてきた。そうした運動は、アラブ諸国の政治的に対立する勢力と「部外者」を、イスラム教そのものの敵だと非難して、両者に対する憎悪の火をあおってきた。その結果、社会や国家、「外部」との対立および摩擦は加速度的に悪化した。この西側に対する「反感」と西側との「衝突」という状況は、2001年9月11日の事件によって頂点に達した。このような状況の中、イスラム教そのものが、怒涛のごとき文書や口頭による中傷、挑発、非難にさらされた。それらは、時にまったくの無知から出たものであることや、あからさまなでっちあげであることが露見することもあった。

純粹な宗教は、知識に反対するどころか、人々に知識の探求と、知識社会の確立を促しており、その点に疑いはない。恐らく、それを最もはっきり示しているのが、アラブ科学が花開き繁栄した時代として記憶されている、イスラムに代表される宗教が一方に、科学が他方に位置し、両者が強力な相乗効果を発揮していたあの時代であろう。

アラビア語－遺産、資源、危機：知識社会において、言語は、広範な影響力を持っている。なぜなら、言語は欠かすことのできない文化の基礎であり、開発のプロセスは文化という主軸の周辺で展開されるからである。言語は、知力、創造力、教育、情報、遺産、価値、信仰など、文化を構成する数多くの要素と関連していることから、文化体系の中心に位置している。ところが知識社会と未来への入口にある現在、アラビア語は、理論化、文法、語彙、用法、文書化、創造性、評論などで深刻な課題と真の危機に直面している。さらに、情報技術によって引き起こされた、言語のコンピューターによる自動化に関連した新しい課題も、これらの危機をさらに深刻なものとしている。

アラビア語と、技術の移転と吸収の関係には、数多くの問題が関わっている。中でも主要なものに、大学教育のアラビア語化とアラビア語の教育という、中心的で相互に密接に関連する2つの問題がある。大学教育をアラビア語で行うアラビア語化は、若者が母国語で確固たる批判的能力と創造的能力を発達させ、増加傾向にある科学的知識の吸収を可能にするために、きわめて重要になってきている。さらに、科学の分野でもアラビア語化を怠れば、異なる科学分野間のコミュニケーションが円滑に行われず、知識の交流が遅滞する。われわれは、アラビア語化が全員に外国語を教える努力とともに行われるべきであることを強調するとともに、言語は人間開発全体における礎石の1つであるということを訴えたい。

アラビア語教育はまた、方法論とカリキュラムの両面で深刻な危機に陥っている。この危機が最も顕著な点に、アラビア語を使

うことの機能的側面がますます軽視されるようになってきていることがある。日常生活でアラビア語技能が低下してきたほか、アラビア語の授業は読むことを犠牲にして、書くことのみ限定されている場合が多い。アラビア語の教育事情は、もはや一般的な古典アラビア語が話し言葉としては事実上用いられなくなったという事情と切り離して考えることはできない。古典アラビア語は、読み書きのみに使用される言語で、知識人と学者の公式言語であり、多くの場合は講義で知識を示すのに使われる。古典アラビア語は、真心のこもった自然な表現、感情、日々の出会い、普段の意思疎通の言語ではない。また、人が自己の内面または周囲の状況を発見するための手段でもない。

このような状況の中で、本報告書は、アラビア語の言語保護策を強化すること、そして、アラビア語が（本来持っている）普遍的な性格と新しい情報技術の発達を吸収する能力を発揮できるような実用性を高めることに、決意をもって取り組む必要が出てきたことを強調している。ただし、これは、世界の諸言語との関係が強化され、言語とその創造的産物の向上に必要な経済的、社会的、技術的条件が満たされることを前提にしている。

大衆文化、順応と創造性との狭間で：共同体社会や口承の民俗文化は、あらゆる社会に住む人々の知的、精神的な生活や日々の行動を豊かにしてきたし、これからも豊かにし続けるであろう、経験と創造的努力が無尽蔵につまった宝庫である。民俗文化は、一般的に、実に豊かな構造を有し、そこに内包されるのは知識、信仰、芸術、道徳、法律、習慣、伝統的な産業知識など多岐にわたる。

アラブのさまざまな民俗文化も、こうした性質すべてを兼ね備えている。なかでもアラブの民俗文化に特有なのが、2つの声を表わしているという点で、1つの声は、馴染みのある様式に忠実であることを促す、順応者の声であり、もう1つは、一般通念に疑問を投げかけ、知識の追求を促す、創造的な声である。アラブ大衆文化に知識が欠落しているとは言い難い。物語の形態としてよく用いられる、伝記や生活史の多くは、歴史的、地理的知識や、

人間の洞察に満ちている。想像上の理想世界を描いた空想的な物語は、人々のあこがれや夢、野望を表現している。これらを含めたさまざまな形態の口承文化は、夕べのつどいや集会で繰り返して暗誦され、歴史的知識や習慣にまつわるしきたりを共有する手段となっている。人気の高い物語の多くは、情報の価値の重要性を強調し、情報のほうが富よりも価値があるということを教えている。また、大衆社会が書物に対し共通して示す高い尊敬は、彼らが学習と知識に大いに価値を置いていることを示すものである。

文化の開放性、模倣から創造的な相互作用へと：歴史的にアラブ文化は、閉鎖された体系ではなく、むしろ大きな歴史の転換期には門戸を開き、発展し、自らの枠を超える高い能力を示した。アラブ社会は、他国とは異なる点や異なる変化を経験しているにもかかわらず、他国の経験を歓迎し、自国の知識体系や生活様式に取り入れた。

アラブ文化が受け入れた外部からの2つの大きな影響のうち、第1の影響は、イスラム歴（A.H.）3世紀から4世紀、つまり西暦（A.D.）9世紀から10世紀にかけての、科学の体系化とギリシャの文明と科学との出会い（というより実際には、これらの科学に対する需要とその輸入）の時代にまで遡る。

第2の大きな経験は、19世紀初頭に、近代アラブ世界が西欧文明と出会い、科学や文学をはじめ、西欧文化の諸側面に対して門戸を開いた時に訪れた。この出会いの結果、アラブの文化的遺産の復活と近代化が起これ、アラブ文化は過去の伝統を引き継ぐとともに、未来に向かって大きく解き放たれ、知識や科学、芸術、文学、技術のすべての分野で、近代化の活力と西欧の豊かな産物を十二分に利用することになった。

しかしながら、アラブ文化も他の文化の例にもれず、均質な世界文化の出現という課題、ならびに文化的多様性、文化的特性、「自己」と「他者」の問題、独自の文化的性格に関する諸問題に直面している。これらの問題やそれに類似した問題は、国民に憂慮、恐怖、危惧の念を起こさせる。言語や文化の消滅、およびア

イデンティティの衰退や消失への懸念は、アラブ人の思考や文化のさまざまな場面で見られるようになってきた。

本当のところ、アラブ文化に選択の余地はなく、新しい世界的な実験にもう一度取り組む以外に方法はない。「(国際社会における) 勝者」の勢力が地球の隅々にまで手を伸ばし、あらゆる形態の知識、行動、生活、工業製品、技術革新を支配している世界において、アラブ文化も歴史および過去、そして受け継がれてきた文化とともに暮らすことだけに安住し、自らを封じ込めるわけにはいかない。確かに、アラブ文化に根付いている一部の風潮は、引きこもりの政策(policy of withdrawal)、つまりこの世界文化がもたらすあらゆる価値や概念、慣行に対して否定的な敵対政策をとることを好むであろう。これは、ある意味では、もっともだと思われるかもしれない。しかし、「相互作用のない」否定的な政策によって唯一もたらされるのは、アラブ文化の構造の強化と発展ではなく、弱体化と縮小なのである。

さらに、世界文化は、独自の知識、科学および技術的特質を有しており、各国がこれらを軽視するの危険なことである。世界文化の開放性、相互作用、同化や吸収や修正への柔軟性、批判や検討への積極性は、アラブ社会における創造的な知識の生産を必然的に刺激する。このことは、現代アラブ文化の多くの分野においてすでに顕在化している。これらの分野では、いくつもの創造的な発展があり、世界的な相互作用や人的な文化交流が果たした有益な役割が明らかになっている。このプロセスは、国内の妨害や外部の障害にもかかわらず、また一部の勢力による完全なる覇権の追求や、理解、対話、協力、権力交替の道より衝突と紛争の道を選ぶような、難しい内外の政治状況にもかかわらず、引き続き進行するだろう。

アラブ文化のさまざまな要素を分析した結果、3000年以上におよぶ同文化の本質が、3000年を経て第3のミレニアムを迎えた今も、(約2000年前の) 第1のミレニアムから第2のミレニアム初頭と同じように知識社会の創出を支え得る能力をもっていることを示している。そればかりでなく、アラブ文化が持つ強さと豊か

さは、アラブ社会がグローバル化の激流に有効に対応する能力を高める可能性もある。

経済構造：資源の消耗から知識の創造へ

アラブ諸国全体の生産様式の中でも、知識獲得に影響を及ぼしているのが、石油を中心とする天然資源の消耗と、外国人労働者への依存である。この外国人労働力への依存型経済様式のもとで、アラブ社会は海外から専門知識や技術を輸入するようになる。それが手早く簡単な手段であることによるが、最終的には自前の知識の需要を弱め、国内で知識を生産し、経済活動に効果的に用いる機会の喪失につながる。アラブの経済活動の大部分は、主に旧来型の農業や、外国企業から取得した生産ライセンスに依然として極度に依存し、消費財の生産に特化した産業などの、第一次産品に集中している。同時に、資本財産業や高度技術を伴う産業の比率は低下し続けている。アラブ市場の規模の小ささ、アラブ経済のひ弱な競争力のほか、政界エリートと財界エリートの競合や時として衝突をも助長する透明性と説明責任の欠如が、工業製品に対する需要に悪影響を及ぼしている。十分な競争がないことが、生産性を低下させ、ひいては経済活動における知識の需要を低下させている。その代わりに、政治と金の世界であからさまに発揮されているのが、権力構造内部の利益誘導から生まれた、比較優位性と利益の最大化に邁進する能力である。また、外の世界への門戸解放に対するアラブ経済の抵抗や、国際競争への参入不足、ならびに輸入代替政策による時として過剰なまでの国内産品の保護が一体となって、生産性の向上とそのための知識の採用を遅らせてきた。

知識に対する需要が脆弱であることの原因は、過去25年間にわたりアラブ諸国の経済成長と生産性が停滞していたことだけでなく、富が少数の掌中に過剰集中していたことにあった。所得および富の分布に歪みがありながら、経済成長の達成に成功してきた国も過去にあったが、それはかつて世界中のいたるところに存

在した閉鎖経済を特徴とする状況下で起こったのである。グローバル化に促されて資本市場の開放が起こると、富の集中による地域成長の機会は減少する。膨大なアラブ資本が、先進国には投資されているのに、アラブ世界へは投資されていないということは、人間開発の観点から重視するべきは、金銭や富の保有ではなく、富がいかに生産的に投資されるかという点であることの確かな証拠となっているといえる。

アラブ世界の知識の前進には、経済成長の回復、および回復の主たる原動力である生産性の向上が必須であるが、それだけでは十分とはいえない。アラブ社会、実業界、市民社会、および各世帯で意思決定権を持つ者が、知識社会の構築という目標を最優先課題とし、それをすべての消費や投資の決定に反映させることができ初めて十分といえる。

社会的インセンティブ：権力と富は知識と倫理を低下させる

政治的、社会的、経済的条件は、価値体系と社会的インセンティブを正しく方向づけるうえで決定的な役割を果たす。大半のアラブ諸国は独立後、歴史上みられた独裁制とほぼ変わらないような国家政治体制のもとに置かれるようになった。社会および個人の自由が制限された地域もあれば、完全に欠落した地域もあり、こうしたことが人々の道徳と現実的な価値観に影響を及ぼした。

アラブ諸国では、権力の分布が富の分布と一致していることもあり、そうした権力の分布が社会および個人の道徳に影響を与えてきた。個人的利益の追求、公益に対する私益優先、社会的・道徳的腐敗、誠実さと説明責任の欠如など、多くの病弊のすべてが、歪んだ権力の分布とその結果生じた社会格差に何らかの点で関係していた。何よりもこのような状況の犠牲となってきたのが正義であった。

アブドゥル・ラーマン・アル・カワキビ (Abdul Rahman al-Kawakibi): 専制政治の性格
我々が慣れきってしまったことは、卑屈な服従を丁寧な敬意とみなすこと、こびへつらいを礼儀と、お追従を雄弁と、大言壮語を実質と、屈辱の甘受を慎み深さと、不正の黙認を従順と、人間の権利の追求を傲慢とみなすことである。こうしたわれわれの逆転した制度では、最も単純な知識の追求でさえ気取りととらえ、未来に対する大志を不可能な夢とし、勇気を身のほど知らずの大胆さと考え、ひらめきを愚案と、騎士道を攻撃と、自由な言論を横柄と、自由な思考を異端として描くのである。

石油ブームもまた、創造力の向上や知識の獲得と普及に寄与したはずの数多くの価値と社会的インセンティブの弱体化に一役買った。石油ブームの間に、否定的な価値観が拡がり、創造力はなおざりにされ、知識は人間開発にとっての重要性を失った。科学者、教養人、知識人の社会的地位は低下し、社会的価値は、それがどのようにして得られたかに関係なく、金銭と財産という基準で測られた。知識と知性は、所有権と所有に取って代わられた。中でも最悪の結果が、独立と自由の価値と批判精神の重要性までもが葬られたことだった。

抑圧と疎外が、達成や幸福、公約への欲求を鈍化させた。その結果、無感動、政治的無関心、空虚感が、さまざまな層に広がり危険なまでに一般に浸透してきている。アラブの人々は、自国の変革への関与から、ますます遠ざけられつつある。

本報告書は、国家、市民社会、文化団体、マスメディア、見識ある知識人、そしてすべての人々に対し、政治的、社会的、経済的領域での行動と革新を促すような価値を醸成することを要求する。アラブ文化にとって「心の改革」は、確かに重要であるが、「行動の改革」も等しく緊急に必要とされている。

アラブ地域が置かれた求心力に欠ける経済的、社会的、政治的環境は、その他の諸国が人々を引きつける求心的な要素を持っていることもあって、アラブ人の頭脳流出の増加という現象を招いてきた。有能なアラブ人が海外へ移住することによって、受入れ国はアラブ諸国が国民に対して行ってきた訓練や教育への投資から間違いなく利益を得ることから、逆向きの開発援助というべ

き形態を呈している。しかしながら、それ以上に重要なのが、大量の技能流出による機会費用、つまり移民が出身国における知識と開発に対してもたらしたはずの失われた潜在的貢献である。このような二重の損失に対応し、その危険を最小限に抑えるには、第1に、海外在住のアラブ人移住者集団の専門技術および知識を活用することによって、第2に、アラブ人国外居住者が、移住時よりもはるかに大きな人的資源として、出身国に一時的な任務または永住のために帰国することを促すようなインセンティブを与えることによって、真剣に取り組んでいくことが求められる。これを達成するには、高度な能力を有した移住者たちを、母国のために役立つような生産的かつ個人的に満足が得られる仕事に、一時的あるいは永続的に呼び戻すことができるような、本格的な人間開発のためのプロジェクトの立ち上げが不可欠である。

アラブの社会的・経済的構造の分析では、文化の場合と異なり、アラブ世界における知識獲得に見られる根深い障害が明らかとなる。改革を通じてこれらの障害を克服しない限り、知識社会の発展は不可能である。

アラブの頭脳流出

1995年から96年にアラブ系の大学にて学士号を取得した卒業生30万人のうち、およそ25%が移住した。98年から2000年にかけて移住したアラブ人医師の数は、1万5000人を上回った。

データ提供：A.B.Zahian

政治的状況

圧制、知識、開発：本報告書が論じるとおり、アラブ諸国において、知識獲得を阻む政治的障害は、社会経済的構造から生じる障害より一段と深刻である。これに対し、文化的特徴は、社会経済的構造と比較しても、大きな障害とはならない。

政治権力は、知識の方向づけと、その発展への影響力行使という点で重要な役割を果たす。それは、自らの目標に都合のよい知識を育成し、対立するものは抑圧する。アラブ諸国では、平和的

な権力交代のためのルールである民主主義が確立されていない中、政治不安ならびに政治的地位の争奪戦が、知識の成長を妨げている。そのような不安定な政治状況は、政治戦略や権力闘争による科学機関の支配を招いた。これらの機関の運営にあたっては、政治的忠誠心が、効率や知識に優先している。権力が、活動的な精神に足かせをし、学びの火を消し、技術革新への意欲を殺している。

本報告書は、政治の強制を受けることなく知識を生産し、推進できる、独立した知識領域の確立を求めている。これは、政治活動と知識を民主化し、知識の自由な獲得と生産を確保することを通じてのみ可能である。

アラブの人々に知識に対する基本的権利、つまり知識が花開くための前提となる思想と表現の自由を保障するには、法律が必要である。大半のアラブ諸国は、各種の国際人権条約に署名したが、それらが法律を尊重する文化として浸透したり、国内の法規制に取り入れられたりすることはなかった。しかし、アラブ諸国における自由の問題は、こうした法律の施行というよりは、むしろ法律が守られていないことに関係している。弾圧や法律の恣意的な適用、対象を選択して行う検閲をはじめ、政治的動機に基づく制限が蔓延している。こうした問題は、出版、結社、一般的集会、電子メディアに対する法的規制の形をとることが多く、これらの措置が意思疎通や、文化的な役割の遂行を妨げている。こうした法的規制はまた、知識の普及や世論の醸成も妨げている。

しかし、こうしたこと以上に危険なのが、治安当局が出版物を押収したり、人々の入国を禁止したり、書籍市で特定の書籍の販売を妨げ、一方で、その他の本の販売促進をするなどの制約をしばしば課すことである。「国家安全保障」または公的秩序を口実に行う治安当局のこうした行為は、憲法および法律の範囲を超えたものである。このほかにも、公衆道徳の番人を自認する狭量な人々や、書籍、記事、メディア関連の検閲など、制約にはさまざまな形態がある。自由の抑圧あるいは否定の一番の犠牲者は、創造性、革新、そして知識である。

課題を提起する世界状況: 現在のような形態をとって現行の制度内で進展するグローバリゼーションは、しばしば富裕で強力な国家の利益に与し、そうした国々による世界経済、知識の流れ、ひいては開発機会の支配を招く傾向にある。グローバル・ガバナンスを、アラブ諸国を含む開発途上国のニーズや要望を重視した均衡のとれたものへと変化させない限り、グローバリゼーションは、人間の進歩を達成しようとするこれらの国に役立つものとはならない。

「注意をしないと、知的所有権制度は、開発途上国の利益にとって有害となる歪みをもたらすかもしれない。」

知的所有権委員会(Commission on Intellectual Property Rights) (London, 2002年9月)

おそらく、知識の観点から見て、最も重要な事例は、世界レベルの知識の主要な生産者である先進国が、彼ら西側先進国が主に所有している知的所有権という手段を通じて、知識を公共の財産から私有物へと転換するべきだと主張していることだろう。今では、開発途上国で生まれ、その後、先進国の機関が取得した知識でさえ、このような事態に直面している。この傾向は、途上国が新しい知識を獲得する機会を減少させてしまう恐れがあるとともに、とくに医学や薬学といった生産的な部門を危機に陥れている。

アラブ諸国の場合はとくに、知識獲得システムの効果の質的向上を急速に高めるために、アラブ社会全体が一層緊密で効率的な協力をしていくことが求められている。

アラブの開発のジレンマを解決するには、人間開発、つまり市民全体の開発と各人の経済的、社会的、政治的生活における役割の進展に十分な焦点を当てない限り、困難である。

Mustafa Al-Barghouthi

報告書は最後に、アラブの知識状況の分析を、5つの柱に支えられたアラブ知識社会の戦略的ビジョンとしてまとめることにする。

1. 法律に裏づけされたグッド・ガバナンスによって、意見、言論、集会の自由という重要な自由を保障する。自由のある環境は、知識社会に欠かせない前提条件である。これらの自由は、知識の生産、創造性と技術革新、活発な科学研究、技術開発、芸術的・文学的表現にとって最低限必要な基準といえる。憲法、法律、行政手続きを、改正し、基本的自由に対するあらゆる制約を取り除く必要がある。とくに、行政による検閲と、知識をはじめとするあらゆる種類の創造的表現を発表し普及させるには、保安機関の規制を撤廃しなければならない。
2. 良質な教育を万人に普及させる。教育改革への提言の詳細は次のとおりである：幼児学習を優先する。すべての人が基礎教育を受けられるようにし、少なくとも10学年まで延長する。生涯学習のための成人教育制度を開発する。全段階の教育の質を改善する。高等教育の促進に特別の注意を向ける。教育のあらゆる段階で、独立した定期的な質の評価を行う。
3. 科学を定着、浸透させるとともに、すべての社会活動で研究開発能力を構築し普及させる。これは、基礎研究を促進すること、ならびに各地域の創造性や技術革新を中央で統合するネットワークを確立することで達成することができる。このようなネットワークは、社会組織全体へ行き渡り、各地域や国際的な領域の相互支援的かつ補完的な結びつきを可能とする。

4. アラブの社会経済的構造の知識型生産への移行を急ぐ。そのためには、知識と技術能力を活用して再生可能な資源を開発し、経済構造と市場の多様化への確かな移行を遂げることが必要である。また、「新興国・地域」におけるアラブの存在を高めること、そして社会的インセンティブ（動機づけ）を強化することも必要である。つまり、物質所有が価値の中心を占め、金銭と権限という2つの権力を生み出す源泉を手に入れ、そこからの利益を追求する、現在の風潮とは対照的に、人間開発のための知識の獲得と適用を支援するような制度の強化が求められている。
5. 正統的で、寛容かつ開かれたアラブの知識モデルを開発する。そのためには次のことが必要である。
 - 真の宗教を政治的利用から解き放ち、批評的な学問を尊重する。この改革には、純粋な宗教がもつ啓発的、道徳的かつ人道的な物の見方（ビジョン）への回帰、宗教組織の政治権力者、政府、国家、そして急進的な政教運動からの独立の回復、知的自由の認知、解釈法学 (interpretative jurisprudence) の活性化、異なる教義や宗派や解釈に対する権利の保護といった要素が含まれる。
 - アラビア語の進化を、科学用語の翻訳と簡単な語法開発のための本格的な研究調査および言語改革の実施によって促進させる。これには、子ども向け番組や文字および音声出版物で使用されるような「古典一口語」で用いられる常用単語を管理する専門的で機能的な辞書や参考書の編纂も含まれる。これと並行して、公式および非公式の教育ルートを通じてアラビア語の習得を容易にしたり、幼児向けの創造性の高い新しい読み物を創作したりする継続的な努力も欠かせない。
 - アラブの文化遺産の中に無数に存在する優れた点のいくつかを再生させる。こうした優れた点は、自己中心的な自画自賛に留まらず、それを超えた方法で、アラブの知識モデルの中

核に取り入れていかなければならない。こうした文化的遺産は、アラブの精神と制度の中にアラブ型の知識体系を発達させ育成していくうえでの動機づけを与えるものの一部として捉え取り入れていかなければならない。

- アラブ諸国の国内の文化多様性がより豊かになるよう促進し、多様性を尊重する。このためには、アラブ文化の中にあるすべてのサブカルチャーを保護するとともに、それらが相互に作用し、混じり合い、成長し、繁栄していくことを奨励することが求められる。
- 他文化に門戸を開く。このような相互作用は、他言語への翻訳、アラブ文化以外の文化や文明との知的で柔軟な交流の促進、アラブ地域の機関や国際機関からの利益を最大限に利用すること、一層強力なアラブ諸国間の協力を通じて、世界秩序の改革に着手することによって、強化されるであろう。

アル-キンディ (Al-Kindy): 出所にかかわらず真実を歓迎する

「それがどこから来ようと、たとえ自分たちとはまったく異なる人種や遠くの国からきたものであっても、真実を歓迎し、獲得することにしりごみするべきでない。真実そのものは別として、真実の追求ほど大切なことはない。われわれは、真実を、そして真実を述べる、またはもたらす者を軽んじてはならない。」

本報告書が末尾で断言しているとおおり、知識は、アラブ人が遵守し、行使すべき宗教的義務に非常に近い。知識は、尊厳と繁栄の未来へとアラブ社会が向かう、果てしない旅路の道標だ。知識の探求は、宗教、文化、歴史、そして成功を求める人々の意志によって促される。旅路を遮るのは、人間の仕業に他ならない。すなわち社会的、経済的、そして何にも増して政治的な、過去と現在の欠陥が作り出した構造的な問題の仕業である。知識の新たなミレニアム（千年紀）の幕開けに、アラブ人は、知識の世界でしるべき場所を得るため、この欠陥構造を取り除き、改革を進めていかななくてはならない。

本冊子はアラブ人間開発報告書 2003 の一部(Executive Summary p1-13) を抜粋・翻訳したものです。報告書の全文は、<http://www.undp.org/rbas/ahdr> よりダウンロードできます。

書籍版の入手先:

United Nations Publications

Room DC2-853, 2 UN Plaza

New York, NY 10017, USA

Telephone: (212) 963-8302,

Fax: (212) 963-3489

E-mail: publications@un.org

アラブ人間開発報告書2003 概要

2003年12月

国連開発計画(UNDP)東京事務所
渋谷区神宮前 5-53-70 UNハウス8F
<http://www.undp.or.jp>



昨2002年、初めて発刊された「アラブ人間開発報告書 (AHDR 2002)」は、21世紀の幕開けに際し、アラブ世界が直面する最も重要な開発課題を取り上げた。本年の第2回報告書は、最重要課題の1つである、アラブ諸国における知識社会に焦点をあて、アラブ世界の開発課題への取り組みを継続するものである。

本報告書が末尾で断言しているとおおり、知識は、アラブ人が遵守し、行使すべき宗教的義務に非常に近い。知識は、尊厳と繁栄の未来へとアラブ社会が向かう、果てしない旅路の道標だ。知識の探求は、宗教、文化、歴史、そして成功を求める人々の意志によって促される。旅路を遅るのは、人間の仕業に他ならない。すなわち社会的、経済的、そして何にも増して政治的な、過去と現在の欠陥が作り出した構造的な問題の仕業である。知識の新たなミレニアム（千年紀）の幕開けに、アラブ人は、知識の世界でしかるべき場所を得るため、この欠陥構造を取り除き、改革を進めていかななくてはならない。(本文より)